

独居高齢者の生活・意識・コミュニケーション

— 札幌市厚別区A地区の調査から —

西城戸 誠・堀川 尚子・猪瀬 優理

要 旨

本稿の目的は、札幌学院大学社会情報学部の社会情報調査実習において1998年6月に行った『高齢者の生活についての調査』に基づき、独居高齢者の生活、意識、コミュニケーションの実態を把握し、さらに独居高齢者のコミュニケーションがどのような影響を受けているのかという点を明らかにすることである。分析の結果は2年前に同地区で行われた先行調査をほぼ支持するものであり、次の4点に集約される。第一に独居高齢者は子どもがいないのではなく、何らかの事情で別居を選択しているが、子ども・嫁・孫といった肉親とのつながりは維持されている。第二に独居に伴う家族内役割がない部分を補うような「地域家族」の形成、つまり親密な近隣関係は形成されていないと考えられる。第三にコミュニケーション状況の違いについては、年齢による差が見いだされたものの、その他の要因は明確に呈示することはできなかった。

第四に独居高齢者が潜在的かつ顕在的に抱えている専門機関サービスが必要とされている状況が確認できた。

1. はじめに

高齢化の進行に伴い、一人暮らしの高齢者の比率も年々増加している。国立社会保障・人口問題研究所によれば、世帯主が65歳以上の世帯は1995年の867万世帯から2020年には1718万世帯へとほぼ倍増するという。また、65歳以上の単身世帯は、1995年の220万世帯から2020年には537万世帯と2.4倍に、75歳以上の単身世帯は、95年の92万世帯から2020年の306万世帯と3.3倍にもなるという（出典：国立社会保障・人口問題研究所、1998、『日本の世帯数の将来推計(全国推計)』）。

1998（平成10）年10月推計）。

このような状況の中で、一人暮らしの高齢者（以下、独居高齢者）の実態を把握することは、独居高齢者の孤独死、緊急時の支援などへの対策を考える上で重要であろう。本稿の目的は、札幌学院大学社会情報学部の社会情報調査実習において、1998年6月に行った『高齢者の生活についての調査』をもとに、独居高齢者の生活、意識、コミュニケーションの実態を把握することである。

今回行った調査の先行調査として、札幌市厚別区A地区の社会福祉協議会が1996年11月に行った『一人暮らし高齢者世帯 生活アンケート調査報告書』がある。本稿の第一の作業は、この調査結果の追調査としての現状

分析を行うことである。

また、上述したように独居高齢者の孤独死が問題になっている背景には高齢者のコミュニケーションの不足が指摘されている。その一方で独居高齢者は家族と同居する高齢者と比べて近隣関係が密であるという指摘もある。非常に限定されたデータではあるが、一人暮らしの高齢者のコミュニケーションがどの程度で、何に影響を受けているのかを検証することが本稿の第二の課題である。

さて、本稿の構成は次の通りである。まず調査の対象地域の特色と調査の方法を述べる(2節)。次に対象者のプロフィールを紹介し(3節)、独居高齢者の生活、意識について概観する(4節)。これらの特性を踏まえて、独居高齢者のコミュニケーションの実態を分析する(5節)。最後に得られた知見と今後の課題を述べる(6節)。

2. 調査の対象と方法

今回の調査対象地である札幌市厚別区A地区は、1960年代後半～70年代前半にかけて開発が進んだ、市営住宅と一戸建て住宅で構成される住宅街である。ここ数年急速に人口の高齢化が進み、1992年に10.9%だった地区の高齢化率は、1998年4月現在で20.0%にまで上昇した。これは区平均の11.6%、全市平均の12.8%を大きく上回っている(図)。また、高齢者のいる世帯に占める一人暮らし世帯の割合は28.3%(1998年4月現在)であり、区平均の12.0%に比べ突出している点も特徴的である⁽¹⁾。

日本の人口高齢化率は2005年には19.6%に達すると予測されており(国立社会保障・人口問題研究所、1997「日本の将来推計人口」)、近い将来A地区と同様の状況を迎えることになる。その意味でも、高齢化先進地であるA地区の独居高齢者の生活実態を把握しておくことは必要であろう。

以下の分析に使用するデータは、1998年6

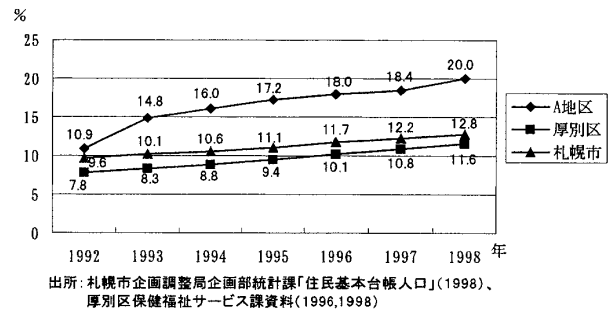


図 高齢化率の推移

月に札幌学院大学社会情報学部の社会情報調査実習において実施した「高齢者の生活と意識についての調査」にもとづいている。調査対象は札幌市厚別区A地区に在住する65歳以上の独居高齢者であり、同地区社会福祉協議会の協力を得て、該当者の名簿から系統抽出法により300名を抽出した。調査は郵送法(学生調査員が戸別訪問し回収)によって行われ、有効回収率は50.0%(150名)であった。

3. 対象者のプロフィール

まず、はじめに調査回答者のプロフィール(性別、年齢、所得、居住形態、一人暮らし歴、子供の有無とその理由、健康状態)について概観しよう。

表1は、性別と年齢階層との関連について見たものである。性別構成は、男性20.4%に対して女性が79.6%と女性の比率が高い。また、年齢階層別については、前期高齢者(65-74歳)が6割、後期高齢者(75歳以上)が4割を占めるが、75-80歳の女性と、80-84歳の男性の比率が比較的高いのが特徴的である。これらの結果は、2年前の先行調査とほぼ同じ傾向である。

次に所得と勤労収入の有無についてであるが、男性のほうが所得(月収)が高いことがわかる(表2参照)。前期高齢者、後期高齢者ごとの性別と所得の分析でも、男性の方が所得が高いという有意な結果が得られた⁽²⁾。特筆すべき点は、月の収入が10万円未満で生活している人が、全体で44.5%、女性では5割

表1 性別と年齢階層

	65-69歳	70-74歳	75-80歳	80-84歳	85歳以上	計
男性	35.7	28.6	10.7	17.9	7.1	20.4(45)
女性	31.2	25.7	24.8	11.9	6.4	79.8(109)
計	32.1	26.3	21.9	13.1	6.6	100.0(137)

$\chi^2=2.84$ d.f.=4 n.s.

表2 性別と所得(月収)

	5万円未満	5-10万	10-15万	15-20万	20-25万	25万円以上	計
男性	4.0	12.0	36.0	20.0	12.0	16.0	100.0(25)
女性	8.7	43.5	31.5	9.8	5.4	1.1	100.0(92)
計	7.7	36.8	32.5	12	6.8	4.3	100.0(117)

$\chi^2=19.17$ d.f.=5 p<.01

強存在していることであり、これらの人々はある意味で限界的な生活を営んでいることが予想される。

一方、勤労収入については、男女の差がなく約1割の人々が収入を得ているにすぎない(表3)。年齢と勤労収入の有無の関係は有意ではなかった。また、勤労収入がない人に対して、働く意志があるかどうかについては、男性で33.3%、女性で20.8%が働く意志があると回答している。もっとも、加齢によって働く意志の有無に影響がある。前期高齢者全体で働く意志があるのが31.9%に対して、後期高齢者は10.2%にすぎない($\chi^2=7.63$ d.f.=1 p<.01)⁽³⁾。

次に、住居形態(市営住宅/一戸建て持ち家)について見てみよう(表4)⁽⁴⁾。男女別に住居形態を整理したのが表4であるが、全体で9割の独居高齢者が市営住宅に住んでいる。また、上述した所得と住居形態との関連を見ると、所得が高い方が一戸建てに住む傾向があることが見いだせる(表5)。

次に、一人暮らし歴と子どもの有無について確認しよう。表6は一人暮らし歴について男女別に集計したものである。全体の6割が10年以上、一人暮らしを続けていることがわかる。また一人暮らし歴には男女の差は見いだせない⁽⁵⁾。

表7は、子どもの有無を男女別に集計したものである。10%の有意水準であるが、女性の方が子どもがいる傾向にある。また、一人

表3 性別と勤労収入の有無

	あり	なし	計
男性	11.1	88.9	100.0(27)
女性	8.5	91.5	100.0(106)
計	9.0	91.0	100.0(133)

$\chi^2=0.18$ d.f.=1 n.s.

表4 性別と住居形態

	市営住宅	一戸建て	計
男性	82.8	17.2	100.0(29)
女性	89.7	10.3	100.0(107)
計	88.2	11.8	100.0(136)

$\chi^2=1.07$ d.f.=1 n.s.

表5 住居形態と所得(月収)

	10万円未満	10-20万円	20万円以上	計
市営住宅	50.0	44.1	5.9	100.0(102)
一戸建て	0.0	50.0	50.0	100.0(14)
計	44.0	44.8	11.2	100.0(116)

$\chi^2=28.48$ d.f.=2 p<.001

暮らし歴と子どもの有無についての関連をみてみたところ、有意な結果は見いだせなかった。必ずしも子どもがいないために一人暮らしをしているというわけではないことが示唆される。表8は、子どもと同居していない理由についての自由回答を整理したものである。子どもと同居することが物理的に不可能であるという理由がある一方で、子どもと同居することによるコンフリクトを回避するためである点や、本人自身の一人暮らし志向という点を見出すことができよう。

最後に健康状態についてみてみよう。表9は、男女別の健康状態の自己評価を整理したものである。全体では「健康と言える方である」と回答する人が43.0%、「特に健康とは言えないが、外出はできる」とするものが39.1%であり、日常生活にほとんど支障がないと考えられる人は、82.1%となっている。しかしながら、「家の中では不自由なく動けるが、外出には不自由を感じる」とする人が

表6 性別と一人暮らし歴

	1年未満	1-3年	3-5年	5-10年	10年以上	計
男性	3.7	11.1	14.8	22.2	48.1	100.0(27)
女性	4.1	5.1	11.2	13.3	66.3	100.0(98)
計	4.0	6.4	12.0	15.2	62.4	100.0(125)

$\chi^2=3.67$ d.f.=4 n.s.

表7 性別と子供の有無

	いる	いない	計
男性	59.3	40.7	100.0(27)
女性	77.0	23.0	100.0(100)
計	73.2	26.8	100.0(127)

$\chi^2=3.41$ d.f.=1 p<.1

表8 子どもと同居していない理由
(自由記述・複数回答)

一人が気楽だから	14
子どもが遠くに住んでいるから	8
家が狭いから	7
それぞれの生活があるから	4
同居すれば互いに気を遣うから	4
娘は嫁に行ってしまったから	4
子どもや嫁と不和	3
元気なうちは一人でいたいから	2
子どもに迷惑はかけられない	2
子どもの家庭の都合	2
子どもの仕事の都合	2
特に不自由がないから	1
猫を飼っているから	1
一人暮らしが長いから	1
北海道がいい	1
計	56

表9 性別と健康状態

	健康である	外出は可能	外出には不自由	家の中で不自由	計
男性	37.0	40.7	14.8	7.4	100.0(27)
女性	44.6	38.6	12.9	4.0	100.0(101)
計	43.0	39.1	13.3	4.7	100.0(128)

$\chi^2=0.91$ d.f.=3 n.s.

13.3%、「家の中でもかなりの移動に不自由を感じる」人が4.7%と、約2割弱の方が健康状態が思わしくないという結果になった。健康状態について性別による差は認められない。この傾向は先行調査とほぼ同じである。ただし、先行調査のように、加齢によって健康状態が悪化するという傾向は見いだせなかつ

た⁽⁶⁾。

4. 独居高齢者の生活と意識

ここでは、独居高齢者の生活と生活に対する意識について概観する。限られたデータであるため、以下言及できるのは、食事、テレビの視聴時間、生活の活動範囲、日常生活の心配事について、意識に関しては、自分自身の生きがい、寂しさについてである。

4-1 独居高齢者の生活

表10は、男女別に日常の食事について分析した結果である。全体では85.3%の人がほぼ毎日自炊していることがわかる。男女差については、統計的に有意ではないものの、男性がほとんど自炊をしない割合が高いことが伺える。この知見を補足するデータとして、インスタント食品を食べる回数について尋ねたところ、男性の方が頻繁にインスタント食品を食べる傾向にあった⁽⁷⁾。もっともこの傾向は独居高齢者に限ったことではない可能性はある。

また、年齢と食事の自炊の関連については、統計的に有意な結果ではなかった。むしろ、自炊をするかしないかは、当人の健康状態に左右されると考えられる。表11から判断すると、本人の健康状態が悪いと自炊しない傾向があることが見いだせる⁽⁸⁾。

では、自炊をしない人はどのような食事なのであろうか。表12は、自炊をほぼ毎日行っていない人の中で、最も多い食事の内容を示したものである。スーパーなどで既製の弁当類を購入するのが最も多く、次に給食サービスを利用するという回答が多い。その他の事

表10 性別と食事

	ほぼ毎日自分で作る	半分ぐらいは自分で作る	ほとんど自分では作らない	計
男性	76.9	7.7	15.4	100.0(19)
女性	87.3	7.3	5.5	100.0(110)
計	85.3	7.4	7.4	100.0(136)

$\chi^2=3.09$ d.f.=2 n.s.

例は全てホームヘルパーの人に作ってもらうという回答であった。

次に日常生活の活動範囲について見ていこう。表13は、活動範囲とその頻度について整理したものである。特徴として見いだせるのは、第一に活動範囲がA地区近郊にとどまっている点⁽⁹⁾、第二に家族・親族に会いに行く頻度が月に1度未満が圧倒的に多い点⁽¹⁰⁾、第三に費用がかかる娯楽にはほとんど行かない点である。また、それぞれの活動内容の頻度と、性別、年齢、健康状態との関連は全く見いだせなかった。

しかしながら、表13の結果については、無回答の割合が高い点を留意する必要がある。一部の設問以外の回答率は軒並み低い。調査の設問の方法に不備があったとも考えられるが、逆に外出はほとんどしなく、自宅にいる独居高齢者が非常に多いということを示唆しているともいえる。例えば、1日のテレビの視聴時間は、4時間以上見ている独居高齢者は7割を占めている⁽¹¹⁾。健康状態が悪く外出ができない人がテレビを長時間見ているとも考えられるが、テレビの視聴時間と健康状態には関連が見いだせなかった。つまり、独居高齢者は外出をすることは少なく、普段は自宅にいることが多いと考えられる。

最後に、日常生活における心配事について見てみよう。先行調査の知見は、何らかの心

表13 活動範囲とその頻度 (比率%)

	週3回以上	週1-2回	月1-3回	月1回未満	計
子供・孫の家	5.2	11.7	22.1	61.0	100.0(77)
親戚の家	7.1	7.1	12.9	72.9	100.0(70)
知人・友人の家	14.7	20.0	24.0	41.3	100.0(75)
病院	21.0	9.5	39.0	30.5	100.0(105)
福祉施設	8.8	19.3	15.8	56.1	100.0(57)
宗教団体の会合	10.2	6.8	25.4	57.6	100.0(59)
趣味の会合	9.8	23.0	31.1	36.1	100.0(61)
近くの公園	19.0	12.7	17.5	50.8	100.0(63)
図書館	5.4	12.5	19.6	62.5	100.0(56)
パチンコ店	2.6	2.6	2.6	92.1	100.0(38)
カラオケの店	2.3	2.3	18.2	77.3	100.0(44)
町内小売店	30.0	45.0	11.0	14.0	100.0(100)
新札幌のデパート	20.4	35.4	23.0	21.2	100.0(113)
札幌都心の繁華街	5.5	12.3	35.6	46.6	100.0(73)
お墓参り	3.4	1.7	13.6	81.4	100.0(59)

配がある人が全体の約75%であり、その中でも「自分の健康」と「除排雪」に関する心配が圧倒的に多い。性別ごとの特徴としては、「除排雪」を心配事と回答するのが女性が男性の2倍という結果になっている。

表14は、性別ごとの日常生活における心配事の内容である(一元配置の分散分析)。ここから見いだせるのは、全体的には「自分の健康」と「除排雪」を心配事に行っているということである。また性別ごとの特徴としては、話し相手不足と食事の問題を心配事に行っているのは男性の方が多いという点である。なお、年齢ごとの特徴は有意な差が見いだせなかった。一方、日常生活の中でもっとも心配な点についての回答は、性別・年齢ごとの差はなく、「自分の健康」について心配するというのが圧倒的に多い。

以上の知見は先行調査の結果をほぼ支持するといえる。また、男性の独居高齢者に対しては食事のサービスなどを提供する必要があることも示唆している。話し相手不足の問題については、次節で検討したい。

4-2 独居高齢者の意識

一人で過ごすことが多いと考えられる独居高齢者の毎日の暮らしは、何に生きがいや楽しさを求めているのであろうか。

まず、生活の生きがいや楽しみについて見てみよう。表15と16は性別と年齢ごとに生きがいであると回答した比率である(一元配

表11 食事の形態と健康状態

	ほぼ毎日自分で作る	半分ぐらいは自分で作る	ほとんど自分で作らない	計
健康である	94.6	3.6	1.8	100.0(56)
外出は可能	79.6	13	7.4	100.0(54)
外出には不自由	72.2	16.7	11.1	100.0(18)
家の中で不自由	28.6	28.6	42.9	100.0(7)
計	82.2	10.4	7.4	100.0(135)

$\chi^2=24.13$ d.f.=6 $p<.001$

表12 性別と自炊以外の食事

	外食する	既製の弁当を買う	給食サービスを利用	近所の人が作る	その他	計
半分ぐらいは自分で作る	23.1	53.8	7.7	0.0	15.4	100.0(13)
ほとんど自分で作らない	0.0	33.3	33.3	11.1	22.2	100.0(9)
計	13.6	40.9	18.2	4.5	22.7	100.0(22)

$\chi^2=7.50$ d.f.=4 n.s.

表 14 性別と心配事

	N	健康	除排害	通院の付 き添い	話し相手 不在	買い物	食事	洗濯	掃除	その他
全体	137	78.1	45.3	6.6	10.9	5.1	5.8	2.2	2.9	5.9
男性	28	71.4	39.3	0.0	21.4	3.6	17.9	3.6	3.6	10.7
女性	109	79.8	46.8	8.3	8.3	5.5	2.8	1.8	2.8	4.6
F値	-	0.91	0.50	2.48	4.02*	0.17	9.77**	0.31	0.05	1.48

*p<.05 **p<.01

表 15 性別と生きがい

	N	趣味	仕事	社会奉仕	テレビ	孫の顔を 見る	友人や近 所の人と の交際	宗教	その他
全体	137	55.5	8.8	18.2	58.4	29.2	40.9	13.1	4.4
男性	28	67.9	7.1	25.0	57.1	21.4	39.3	10.7	3.7
女性	109	52.3	9.2	16.5	58.7	31.2	41.3	13.8	4.6
F値	-	2.18	0.11	1.07	0.13	1.02	0.04	0.18	0.04

*p<.05 **p<.01

表 16 年齢と生きがい

	N	趣味	仕事	社会奉仕	テレビ	孫の顔を 見る	友人や近 所の人と の交際	宗教	その他
前期高齢者	78	64.1	10.3	14.1	51.3	25.6	38.5	9.0	3.9
後期高齢者	57	42.1	7.0	21.1	68.4	35.1	45.6	19.3	5.4
F値	-	6.66*	0.42	1.12	5.17*	1.4	0.89	3.06+	0.16

*p<.1 **p<.05 **p<.01

置の分散分析)。全体的には「テレビ」を見ること、「趣味」を楽しむこと、「友人や近所の人との交際」が多いことがわかる。性別による差は有意な結果が得られなかった。年齢ごとに生きがいの内容を見ると、「趣味」を楽しむという回答の比率は前期高齢者が多く、「テレビ」をみること、「宗教」への信仰という回答の比率が後期高齢者に多いことが有意な結果として得られた。これらの知見も先行調査の結果と同様であった。

また、もっとも大きな生きがいについては、「趣味」を楽しむことがもっとも多く(43.3%)、次いで「孫の顔をみる」こと(19.4%)、「テレビ」をみること(13.4%)となっている。また、「友人や近所の人との交際」は4.5%にすぎない。日常的には「友人や近所の人との交際」が生きがいであるとしながらも、自分にとって重要な生きがいではないということは、私見の範囲を超えないが、家族や親族のつながりの方がやはり重視されているということが考えられる。

次に孤独感については、全体では「いつも感じている」という回答が7.7%、「時々感じる」という回答が32.3%と、4割の人々が何らかの寂しさを感じていることがわかる(表

17)。ただしこの結果は、性別、年齢ごとの有意な差は見いだせなかった。一方、「いつも感じている」と回答した人に対して、寂しいときはいつであるのかという質問をしたところ、「病気で寝込んでしまったとき」とするのが70.0%と圧倒的に多い。これらの知見も先行調査とほぼ一致する。

5. 独居高齢者のコミュニケーション

5-1 独居高齢者の社会関係

独居高齢者の生活においては、「慢性疾患に対する日常管理の不十分さ」「経済条件の不安定さ」「精神的扶養が得られにくい」(須田, 1986)などの困難な状況が生じやすいといわれる。このような問題が自力では解決できずに進行した場合、独居の継続は困難になり、子どものもとへの「呼び寄せ」や、老人ホーム等の施設への入居といった対処がなされることになる。一方で、独居高齢者がヴァルネラブルな存在であるという通説を覆すような研究も蓄積されてきている。例えば、独居→孤独という通説は必ずしも当てはまらず、独居高齢者は家族と同居する高齢者に比べて近隣関係が親密であることが実証されている(金子, 1993)。家族と同居する高齢者が家族内での役割をもち、家族外にあらたにネットワークを広げる必要性は必ずしもないのに対して、独居高齢者は家族内の役割がない分、地域社会や近隣との交流を心がけるようになる。こうした役割関係の補完があれば、高齢者が血縁ではなく住縁による「地域家族」に支えられて一人暮らしを継続することも可能である(金子, 1998)。

独居高齢者が適切な身体的・経済的・情緒

表 17 性別と寂しさの度合い

	いつも感 じている	時々感 じる	あまり感 じない	全く感 じない	計
男性	11.5	34.6	46.2	7.7	100.0(26)
女性	6.7	31.7	31.7	29.8	100.0(104)
計	7.7	32.3	34.6	25.4	100.0(130)

x²=5.94 d.f.=3 n.s.

的サポートを得られるかどうかは、周囲の人間や機関とのコミュニケーション状況によって左右される。そこで、この節では独居高齢者が取り結んでいる社会関係のありようや、それにまつわる意識の項目を取りあげて分析する。

第4節で前述したように、独居高齢者は日常生活において様々な心配事を抱えている。それでは、その心配事を誰に相談するのだろうか。表18によれば、多くの人が「身近に心配事などを気軽に話せる相手」がいると回答している。相談相手として最も多く挙げられているのは「子ども・嫁・孫」の36.6%であり、次いで「友人」を選択する人が29.0%となっている。

次に、独居高齢者の日常的な対面コミュニケーション状況をみてみよう。表19は独居高齢者の家への訪問者と、その訪問頻度の内訳である。訪問頻度「週3回以上」と「週1-2回」を、合計して「少なくとも週1回以上」とみなし、日常的に対面的コミュニケーションが保たれている関係と捉える。すると、少なくとも週1回以上独居高齢者の家に訪れているのは「近隣」が47.7%で最も多く、次いで「知人・友人」の43.0%である。相談相手として最も多くの人々が挙げた「子ども・嫁・孫」は29.4%である。

「相談相手」と「訪問頻度」の間には関連がみられるであろうか。「相談相手」で「子ども・嫁・孫」を選択した人、しなかった人の2区分に再カテゴリー化し、「子ども・嫁・孫」の

訪問頻度との関連を調べたところ、両者の間に有意な関連はみられなかった。同様に、「親戚が相談相手」と「親戚の訪問頻度」、「知人友人が相談相手」と「知人友人の訪問頻度」の間にも有意な関連は見出せない。これらの関係においては、日常的な対面コミュニケーションの豊富さと、心配事の相談相手として依存できるかどうかは無関連であるといえる。推測の域を出ないが、肉親や親戚、友人知人とは、電話などによる遠隔コミュニケーションによって、日常頻繁に会わなくても信頼関係を維持しているのではないだろうか。

一方、「相談相手が近隣」と「近隣の訪問頻度」との間には有意な関連がみられた。表20から、相談相手として近隣を選択する人は、近隣の人の訪問頻度が高い傾向が見出せる。近隣関係においては、日常的な対面的コミュニケーションを通じて信頼関係が形成され、相談をもちかけられる相手として選択されるのかもしれない。

ちなみに、表19中に挙げた6種類の訪問者の訪問頻度がいずれも月1回未満であるという人は7人おり、自ら外出しない限り他者との対面的コミュニケーションが少なくなりがちな独居高齢者の存在が示されている。

表21は近隣関係の親密度と年齢（前期・後期高齢者の2区分）の関連を示したものである。全体の傾向としては、近隣とは「挨拶程度」のつきあいをしている人が65.3%で過半を占め、次いで「よく訪ねあう」が31.5%、「ほとんどつきあいなし」は3.2%とごく少数である。この傾向は2年前の調査結果と共通しており、団地内や道で会えば挨拶を交わす程度のつきあいを保っている人が多い。

表18 心配事の相談相手

	計
子ども・嫁・孫	36.6 (34)
親戚	11.8 (11)
友人	29.0 (27)
近所の人	11.8 (11)
民生委員	4.3 (4)
その他	6.5 (6)
計	100.0 (93)

表19 訪問者と訪問頻度

	週3回以上	週1-2回	月1-3回	月1回未満	計
子ども・嫁・孫	12.6	16.8	26.3	44.2	100.0 (95)
親戚	4.1	6.8	20.3	68.9	100.0 (74)
友人・知人	26.7	16.3	23.3	33.7	100.0 (86)
近隣	24.4	23.3	23.3	29.1	100.0 (86)
セールス	10.0	11.4	40.0	38.6	100.0 (70)
宗教団体	12.7	8.9	24.1	54.4	100.0 (79)

ただし年齢別にみても、前期高齢者よりも後期高齢者の方が「よく訪問しあう」親密なつきあいを維持している人の割合が高いことがわかる。

データの制約上、独居高齢者にとって近隣関係が有効なサポート源として機能しているのか、またどのようなサポート機能をもつのかを確かめる術はない。とはいえ、「互いの家をよく訪問しあう」ような親密な近隣関係は、独居高齢者の閉じこもりを回避し、孤独感の軽減・解消につながるという意味で少なくとも何らかの情緒的サポートをもたらしているのではないかと考えられる。

近隣関係が「挨拶程度」「ほとんどつきあいなし」である人に対しては、今後はより親密な関係を望むかどうかを尋ねている。表22は親密な関係を望むかどうかと年齢の関連をみたものである。これによれば、前期高齢者・後期高齢者のいずれにおいても、今後もより親密な関係は「望まない」人の割合が高いものの、前期高齢者に比べて後期高齢者の方が、より親密な関係を「望む」という人の割合が高いことがわかる。

次に、高齢者の社会参加の一形態として、老人クラブへの加入状況をみておこう。老人クラブは地域性の強い年齢階梯集団であり、高齢者の余暇ニーズに合わせて様々な趣味・

娯楽活動を用意している。加入し活動に参加する人にとっては、居住地域内で同年輩の友人をつくる機会、趣味を深めたりあらたな楽しみを見出す機会として、ひとつのサポート源になりうると考えられる。

表23は、老人クラブ加入状況と年齢の関連を表している。全体の傾向としては、加入し実際に活動に参加している人は18.8%、加入していない人が72.7%で、2年前の調査(18.6%、78.4%)と比べて大きな変化はない。そして年齢別にみると、前期高齢者よりも後期高齢者の方が老人クラブに加入し、参加している人の割合が高いことがわかる⁽¹²⁾。なお、性別による加入状況の違いは確認されなかった。

こうした年齢層による違いはなぜ生じるのか。まず、老人クラブに入っていない理由と年齢との関連から類推してみよう(表24)。後期高齢者の不加入理由の第1位は「その他」の項目であり、その内容を明確に把握することはできないが、ひとまずここでは、後期高齢者よりも前期高齢者の方が「他に面白いことがあるため」「活動内容が性に合わない」の割合が高いという傾向が指摘できる。

前期高齢者において、老人クラブへの参加の他に「面白いこと」とはどのようなものだろうか。ひとつの手がかりとして、第4節で行った生きがいと年齢の分析に立ち戻ってみ

表20 近隣の訪問頻度と近隣の相談相手の有無

	近隣に相談相手		計
	あり	なし	
週3回以上	33.3	66.7	100.0 (15)
週1-2回	9.1	90.9	100.0 (11)
月1-3回	0.0	100.0	100.0 (14)
月1回未満	5.0	95.0	100.0 (20)
計	11.7	88.3	100.0 (60)

$\chi^2=9.62$ d. f. = 3 $p<0.05$

表21 年齢と近隣関係

	挨拶程度			計
	よく訪問しあう	挨拶程度	ほとんどつきあいなし	
65-74歳	21.6	75.7	2.7	100.0 (74)
75歳以上	46.0	50.0	4.0	100.0 (50)
計	31.5	65.3	3.2	100.0 (124)

$\chi^2=8.81$ d. f. = 2 $p<0.05$

表22 年齢と近隣との親密さ希望

	望む		望まない		計
	望む	望まない	望む	望まない	
65-74歳	27.0	73.0	27.0	73.0	100.0 (63)
75歳以上	56.3	43.8	56.3	43.8	100.0 (32)
計	36.8	63.2	36.8	63.2	100.0 (95)

$\chi^2=7.81$ d. f. = 1 $p<0.01$

表23 年齢と老人クラブ加入

	加入状況			計
	加入し参加している	加入していないが不参加	加入していない	
65-74歳	7.8	10.4	81.8	100.0 (77)
75歳以上	35.3	5.9	58.8	100.0 (51)
計	18.8	8.6	72.7	100.0 (128)

$\chi^2=15.33$ d. f. = 2 $p<0.01$

よう。表16の分散分析の結果から、後期高齢者よりも前期高齢者の方が、生きがいとして「趣味」を楽しむことを挙げる人の割合が高いことがわかる。

「趣味」の具体的内容はわからないため、ここから先は憶測の域を出ないが、次のように考えることができる。すなわち、前期高齢者には老人クラブへの参加以外に趣味活動の機会があり、後期高齢者が老人クラブの活動や近隣との親密な関係から得ている楽しみを、趣味サークル、あるいは自宅など他の場で満たしているのではないだろうか。

性別と老人クラブ不加入の理由の関連をみると(表25)、男性では「人と会うのがおっくう」という人が33.3%で最も多かったが、女性の場合は「他に楽しいことがあるから」が「その他」と並んで37.0%で最も多くなっている。

5-2 独居高齢者の地域情報源

人間関係がもたらす情緒的・物質的なサポートに加え、地域についての適切な知識や情報が得られることも、独居高齢者にとっては不安感を減じ、ライフチャンスを追求めるための有効なサポート源である。

表26は地域に存在する主な情報源への評価を示している。4項目のうち、A地区に12存在する町内会レベルの情報源「回覧版」と、さらに公的なレベルの情報源「市や区の広報」の両者は合わせてフォーマルな情報源とみなすことができよう。「回覧版」については、合

わせて81.3%の人が「大変役立つ」「まあ役立つ」と評価し、「市や区の広報」については、合わせて86.3%の人が「大変役立つ」「まあ役立つ」と回答している。フォーマルな情報源はおおむね高く評価されており、独居高齢者の生活のサポート源として機能していることがうかがえる。消費行動に関連する「新聞折り込みチラシ」や、近隣との会話における「口コミ」といった情報源への評価は「役立つ」「役立つたない」が半々の評価となっている。

独居高齢者が必要としている情報の具体的な内容をまとめたものが表27である。最も多く望まれているのは健康・医療・福祉に関わる情報である。より具体的には介護保険制度や市営交通の敬老パスなど、高齢者が受けられる福祉サービスについての情報が含まれている。独居高齢者が身体的・経済的に安定した生活をおくるためには、自分が利用できるサービスについての正しい知識を得ることは不可欠である。札幌市では独居高齢者世帯を民生委員が定期的に訪問することになっているとはいえ、地域社会の側でも、市・区の広報や町内会の回覧版等の媒体を通じて、高齢者に理解しやすい情報を呈示していく努力が

表24 年齢と老人クラブ不加入理由

	名称が気に入らない	人と会うのがおっくう	他に面白いことがある	活動内容が性に合わない	その他	計
65-74歳	3.4	17.2	36.2	20.7	22.4	100.0 (58)
75歳以上	3.4	10.3	27.6	3.4	55.2	100.0 (29)
計	3.4	14.9	33.3	14.9	33.3	100.0 (87)

$\chi^2=11.12$ d.f.=4 $p<0.05$

表25 性別と老人クラブ不加入理由

	名称が気に入らない	人と会うのがおっくう	他に面白いことがある	活動内容が性に合わない	その他	計
男性	6.7	33.3	13.3	26.7	20.0	100.0 (15)
女性	2.7	11.0	37.0	12.3	37.0	100.0 (73)
計	3.4	14.8	33.0	14.8	34.1	100.0 (88)

$\chi^2=9.68$ d.f.=4 $p<0.05$

表26 地域の情報源に対する評価

	大変役立つ	まあ役立つ	あまり役立つたない	全く役立つたない	計
回覧版	30.9	50.4	15.4	3.3	100.0 (123)
市や区の広報	43.6	42.7	8.5	5.1	100.0 (117)
新聞折り込みチラシ	20.6	31.4	25.5	22.5	100.0 (102)
口コミ	11.1	39.5	23.5	25.9	100.0 (81)

表27 知りたい情報
(自由記述・複数回答)

健康・医療・福祉	7
政治・市政・経済	5
市営住宅の建て替え	2
地域生活	2
スポーツ・趣味・娯楽	2
おくやみ	1
気象	1
求人	1
計	21

求められるであろう。

6. おわりに

本稿の趣旨は、2年前の独居高齢者世帯調査の追調査を兼ねた現状分析を行い、比較考察、およびあらたな知見を見出すことであった。結論から言えば、比較可能な項目においては2年前の先行調査結果と大きな相違はないのだが、以下、今回の調査であらたに導入した項目についての分析結果も交えて、主な知見を述べていきたい。

本稿での調査対象者には、子どもがいないという訳ではなく、何らかの事情で別居を選んでいる人が多かった。なぜ子どもと同居しないかについては、「一人が気楽だから」という自分主体の理由を挙げた人が最も多かった反面、子ども側の都合や同居した場合の子どもの負担への配慮も理由として挙げられており、一緒に暮らしたいが子どもに迷惑はかけられない、という一種のあきらめ感も読み取れる。

とはいえ、別居はしていても子ども・嫁・孫といった肉親とのつながりは、年齢や性別に関係なく維持されていた。独居高齢者が「心配事を相談できる相手」として第一に挙げるのは肉親であり、情緒的なサポート源としての肉親の存在は大きい。肉親の訪問頻度と「相談相手」の間には関連がないことから、多くは電話等の遠隔コミュニケーションを活用しているのではないかと推察された。

別居の子どもからのサポートは何らかの形で得られていると考えられるものの、家族内役割の無い部分を補うような「地域家族」の形成、すなわち親密な近隣関係は、形成されているとは言い難い状況にあった。むしろ、今以上の親密な関係を望まない人の割合が高く、近隣とはある程度距離をおいてつきあいたいと考えている人が多いようである。憶測の域を出ないが、A地区の地域特性（市営住宅が立ち並び、ここ数年あらたに入居した高

齢者も多い）による住民の匿名性の高さや、高齢者自身の「孤軍奮闘型の自立意識」（藤崎、1998）も作用しているのかもしれない。

属性によるコミュニケーション状況の違いはあまりみられなかったが、年齢（前期高齢者・後期高齢者）の区分によって近隣との親密度、近隣関係に対する構え、老人クラブ加入には違いがみられる。後期高齢者の方が前期高齢者よりも親しい関係を望んでおり、老人クラブへの加入、参加率も高い傾向が見出された。しかしその原因については、あまり説得的な説明はできないのが現状である。データのサンプルの偏りも考慮しなければならないが、年齢と孤独感、健康度、近隣以外の社会関係（肉親や友人知人）との接触頻度、一人暮らし歴などとは特に関連がみられなかった。本稿のデータからは、年齢以外に近隣関係の親密度や老人クラブへの加入・参加率に影響を与えている要因の存在を明確に呈示することはできない。

ただ、前期高齢者と後期高齢者では生きがいとして「趣味を楽しむ」人の割合に違いがみられたことから、前期高齢者には老人クラブへの参加以外に趣味活動の機会があり、後期高齢者が老人クラブの活動や近隣との親密な関係から得ている楽しみを、他の場で満たしているのではないかと考えられた。しかしこれはあくまで推測の域を出ず、趣味とコミュニケーション状況の関連について確認するにはより精緻な分析が必要である。

本稿であらたに導入した「食生活」と「情報」の分析結果からは、独居高齢者が潜在的・顕在的に抱えている専門機関サービスへのニーズをよみとることができる。独居高齢者の食生活状況からは、健康状態が悪化している人は自炊が困難であること。また男性では、「心配事」として食事の問題を挙げる人が多く、自炊の手間や栄養のバランスの考慮が精神的な負担になっている可能性もうかがわれた。近年は、独居高齢者を対象とし食事を提

供する「下宿」などのシルバービジネスも増加しているが、現在の独居生活を継続するという観点からすれば、栄養のバランスのとれた食事を安価に提供する配食サービスの普及が必要であろう。

また、独居高齢者は町内会の回覧版や市・区の広報を、おおむね「役立つ」と評価しており、今後さらに健康・医療・福祉にかんする情報の提供を望んでいる。介護保険制度がスタートすれば、自治体ごとにサービス提供のレベルも種類も様々に異なることから、より一層、各自治体によるわかりやすい情報の呈示が求められるだろう。

本稿では、2年前の先行調査結果との比較考察という目的もあり、年齢と性別以外の諸属性については、十分に分析を行っていない。最後に今後の検討課題として呈示しておきたいのは、住居形態と所得の関係に端的にみられたような、住民間の階層差の問題である。一戸建て住宅居住者は比較的経済的に豊かである一方、市営住宅居住者の半数は月収10万円未満であり、医療費や物価の上昇の影響を受けやすい層ではないかと推察される。階層性と意識やコミュニケーション状況の関連については、「経済的資源が豊かな者ほど関係的資源も豊富であり、経済的資源が乏しい者ほど関係的資源も貧困である」（松本編，1998）という先行研究の指摘があるが、今回の調査データからは明確な関連性は見出されなかった。今後、変数の構成も含めてさらなる検討が必要である。

[謝辞]

本調査の準備段階で、札幌市および厚別区の地域福祉の現状についてご教示いただきました。厚別区社会福祉協議会の職員の方に御礼申し上げます。また、調査実施前の現地フィールドワークの際には、A地区社会福祉協議会の民生委員の方々、厚別ハーティケアセンターの職員の方々に、A地区の状況につ

いてご案内・ご教示いただきました。記して感謝いたします。

[註]

- (1) 地区の高齢化進展の一因には、市営住宅居住者の高齢化に加え、老朽化した風呂なしの市営住宅から若年層が次々と流出していったという事情がある。あらたな入居者募集において高齢単身者が優先されたこともあり、ここ数年に流入した独居高齢者も多い。
- (2) 前期高齢者の所得と性別のクロス分析の結果は、 $\chi^2=6.58$ d.f.=2 $p<.05$ 。後期高齢者の所得と性別のクロス分析の結果は、 $\chi^2=8.80$ d.f.=2 $p<.05$ 。
- (3) 男女別では女性の方に有意な結果が見いだせた。 $\chi^2=7.11$ d.f.=1 $p<.01$ 。
- (4) 回答者のうち1人だけ、賃貸マンションという回答があったが、便宜上分析から除外した。
- (5) さらに一人暮らし歴と年齢とのクロス分析を行ったところ、有意な結果は見いだせなかった。
- (6) この原因として考えられるのは、今回行った調査が郵送調査であり、健康状態が思わしくない方、高齢の方の回答が少ないという可能性がある。
- (7) 週3回以上インスタント食品を食べる男性が10.7%に対して女性は0.9%、週1-2回では男性が17.9%に対して女性は7.3%であった ($\chi^2=21.44$ d.f.=6 $p<.01$)。
- (8) ただし、男女別に三重クロスを行うと、統計的に有意であったのは女性の場合だけであった ($\chi^2=21.44$ d.f.=6 $p<.01$)。私見の範囲を超えないが、男性の方が健康状態にかかわらず、自炊をしない人が女性よりも存在していることが考えられる。
- (9) 活動範囲に関連して、移動手段の有無について補足しておく。自転車を持っている人は全体の22.0%いるが、自家用車は4.7%に過ぎない。
- (10) 家族（子ども・嫁・孫）や親族に会いに行く

頻度は、当然ながら家族・親族が自宅に訪問する頻度が多いほど、頻繁になるという結果になっている。

- (11) 詳細は後述するが、テレビを見ることを生きがいにする人は 58.4%にも及ぶ。
- (12) 全体的な加入率の低さ、特に老人クラブでは「若い層」にあたる 60 代の加入率の低さは、A 地区に限らず札幌市などの大都市に共通する点である。札幌市の 60 歳以上人口の老人クラブ加入率は 13.8%で、全国 46 (東京都を除く) の道府県庁所在地中 41 位。1 位は富山市の 56.7%(1996 年 4 月 1 日現在、富山市統計資料より)。

[参考文献]

- 藤崎宏子(1998)『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館
- 金子 勇(1993)『都市高齢社会と地域福祉』ミネルヴァ書房

金子 勇(1998)『高齢社会とあなた』日本放送出版協会

松本 康編(1998)『都市コミュニティの高齢化と社会的ネットワーク』名古屋大学文学部社会学研究室

須田木綿子(1986)「大都市地域における男子ひとりぐらし老人の Social Network に関する研究」『社会老年学』24: 36-51

杉岡直人(1994)「一人暮らしの高齢者の社会関係に関する家族社会学的研究」『北星論集』31: 33-65

[付記]

西城戸、堀川、猪瀬は 1998 年度の社会情報調査実習に実習指導員として参加した。本稿は、1, 3, 4 節を西城戸、2, 5, 6 節を堀川が執筆し、猪瀬を含めた 3 人で検討を加えた結果を、西城戸と堀川が再度執筆したものであり、文責は 3 人にある。